

1 日 時 令和8年2月17日(火) 午前9時30分～11時30分

2 会 場 本校 大会議室

3 参 加 者

(1) 学校運営協議委員

静岡県あさはた緑地管理事務所 所長

静岡県立こども病院 副看護部長兼教育看護師長兼認定看護管理者

静岡てんかん神経医療センター 療育指導室長

麻機学区自治会連合会 会長

静岡大学教育学部 准教授

本校 PTA 会長

(2) 校内教職員

校長、副校長、教頭、事務長、部主事、病弱・訪問主任、寮務主任、寄宿舎チーフ、教務主任

4 会議次第および議事録(要約)

(1) あいさつ

(2) 令和7年度 学校評価について

- ・安心・安全部ではヒヤリハットについての報告や考察を全校に周知し、事故防止の意識の向上を図るとともに、キラリ&ホットや日常的に児童生徒情報について話題にすることも増えている。一方で、会議で情報共有できる時間が減っている意見もあり、来年度に向けて日課表を見直した。放課後に児童生徒の情報や目標評価の共有や、ケース会議等を設定できるようにしていく。安心安全な医療的ケア実施体制づくりについて、インシデントを未然に防ぐキラリ&ホットやヒヤリハットを学校掲示板で発信し続けたことで、医療的ケアの担当ではない教員も興味関心を持つようになってきた。環境面では、毎月の安全点検を通して、児童生徒の実態に応じて教室環境を整えてきた。防災教育でも、実際に怪我をした教員を想定した防災訓練を行い、けが人が出た時の対応を考えるよい機会となった。継続的な給食掲示、実物の食材に触れる機会の設定、昼の放送等を通して食育が広がった。
- ・指導部では、児童生徒の協働的な学びの姿と、その姿を引き出すための指導支援について研修に取り組み、実践した。活動の中で友達が意識できるような姿や、友達の意見と比べたり受け入れたりする姿が見られるようになってきた。教員向けに ICT 活用の個別相談会を設け、ICT を授業や日常の中で活用することが増えてきた。静岡県障害者スポーツ協会主催の巡回指導でポッチャ教室を実施し、専門的な技術指導やランプの活用法を児童生徒が意欲的に学ぶことができた。OT の巡回指導を受けた教員が各学部でミニ学習会を行い、指導に活かしている。
- ・連携部では、特別支援学校のセンター的機能として連携校の農業高校や市立高校、子育て支援連絡会でこども未来課や保育所、作品展や作業学習を通してセンターハウスなどと連携してきた。また、コーディネーターを軸に児童生徒や家庭の困り感などを主訴とした校内ケース会議を実施し、学部内で情報共有ができてきた。今年度、デジタルプラットフォームの導入に伴い個別の教育支援計画の書式を統一化・データ化していく取り組みを行っている。取り組みを通して本人・保護者との面談の中でも個別の教育支援計画の内容を再確認できている。

(3) 来年度 学校経営計画案についての説明

- ・グランドデザインは児童生徒の「将来の豊かな生活にむけて」を大切に、学校教育目標は継続する。児童生徒を真ん中に、教職員、保護者、関係者がつながることで生まれる新たな発想や整理できることもあると考えている。
- ・安全・安心、指導、連携の3つの大きな柱がある。土台にあるのは安全・安心について。人権と命、働きやすさと働きがい。働きやすさだけでなく、働きがいとバランスよく考えたい。来年度から医療的ケアの防災について研究指定を受け、2年研究に取り組む。来年度から給食課を指導部に配置し、摂食指導に力を入れたい。自立活動課とともに土台となる部分での専門性の向上を図っていく。連携部では、交流及び共同学習について取り組む。デジタルプラットフォームについて本格的に運用がはじまる。手元のタブレットで保護者が個別の教育支援計画を確認できる。放課後等デイサービスとの共有など活用を進め、保護者、関係機関との連携を進めていく。
- ・子どものことをもっと話せるように日課変更をする。放課後の時間を児童生徒のことをしっかり話す時間、校内外とつながるための時間としたい。
- ・来年度もキラリ&ホットを意識し大切にしながら支え合って、つながり合って子どもを支える。
- ・来年度の学校経営計画をつくるにあたり、10月末から分掌課長とヒアリングをして構想してきた。11月に全職員に来年度の計画を伝達。そこから全校で練ってきた。予算ヒアリングも含め、学校全体をみんなで考えてきた。
- ・安全部では、児童生徒を主語に「子どもの視点ではどうか」を大切に取り組む。人権教育では対話の場を大切に、仲間の良さに気づいたり、見聞きしたりする機会としたい。キラリ&ホット、ヒヤリハットを日常的に共有。年間を通して防災を想定した訓練を行う。医療的ケアでは関係機関と連携、全職員が関わる体制づくりをする。児童生徒の目線での環境整備も進める。
- ・指導部では、児童生徒一人ひとりの教育的ニーズに応じた確かな成長と発達を支えるための授業実践と教職員の専門性の向上を目指す。個別最適な学びと協働的な学びの一体的な実現を中核に据え、授業実践や生活指導の質の向上を図る。校内外の実践例を共有しながら、児童生徒が主体的に運動に親しめる学習の充実を図る。ICTについては ICT を目的化するのではなく、学びを支える有効なツールとして位置付け、職員の ICT 活用力を高



め、児童生徒の実態や学習内容に応じた効果的な活用を目指す。専門家による研修や巡回指導等を通して実態把握の力や指導に関する自立活動の専門性の向上や、児童生徒の実態に応じた摂食指導を行うことで、食機能の成長・発達を支える取組を進めていく。職員一人ひとりの専門性と学校全体として組織的・継続的に教育の質の向上を図る。

- ・連携部について、「子どもの学びに返る」こと「連携部としての循環」を大切に校内外の連携を図る。指導支援の根拠を明確にし、成果までを共有。ケース会議を行い、教員間や関係者とで同じ目的を持った指導・支援を目指す。

(4) 協議・意見交換

【学校評価、令和7年度の報告について】

- ・ベースとして達成状況は高い。実態との違いもない。やや評価を低いものについて保護者等から具体的なフィードバックはあるか。改善のヒントとなるような情報を得られているか。
- アンケート調査に加えて、日々の面談等で聞き取り、保護者とのやり取りから得ているものもある。
- ・評価から子どもたちが登校を楽しみにしていることがわかる。地域の交流については今後も力になりたい。
- ・具体的で組織的でこれからの期待を抱ける。医ケアについて関心が高まっている。一方で保護者としては100%を目指すと思う。その感覚、気持ちを知っておくことが大切。医ケアの保護者に成果や取組が伝わるのが大切。ICT活用について、活用に至るまでに個人差があると思う。形だけの導入になってしまうこともある。
- ICTだけに特化ではなく、実体験も大切に。情報教育課でICTのお悩み相談の場を設定。
- ・医ケアや安全安心について、8割をよしとするか。2割の不足をどう捉えるか。ヒヤリハットの事例を知りたい。個別最適について、どのように取り組んでいるのか。地域との連携、個別の教育支援計画の様式について知りたい。
- ヒヤリハット事例としては、接続チューブの止め忘れ、接続の甘さからの漏れなど。医ケア体制については、本人保護者が望むことと学校でできることのギャップもある。できるだけ応えたいが難しい所もある。個別最適について、ドロップタップなどの教材教具。環境設定、背景を黒くするなど、実態に合わせた対応をしている。個別の支援計画について説明。後ほどサンプルを提供する。
- 医ケアに直接かかわる人とそうでない人の評価は分けてもよいかもしれない。
- ・多様な児童生徒、家庭の中で経営している。肯定的な評価が多いことはすばらしい。ただ、特支は評価が高すぎる傾向も見られる。評価が高すぎるとリフレクションできない。学校評価への教員の向き合い方について、学校経営への参画意識をどのくらい持っているかがより大切になる。評価の視点も含めて研修できるとよい。
- ・中央で共通理解している「人権」とは何か。人権意識のズレがあることもある。
- ・医ケアについてなど、成果目標に2つの内容は含まれており、大きな違いが見られる部分がある。タمامシ色になってしまっている面が見られる。例えば、指導について、自立と教科、授業づくりと生徒指導等。
- ・地域や社会に開かれた学校について、連携が大切。連携の質をどう捉えているか。大切なのは連携したかではなく課題解決ができていくか。
- 評価の視点の見直しは必要だと感じた。ここ数年、組織への参画意識を高めようと、「自分はどうかであったか」を評価している。そのため、できたかどうかについては主観が入っていると思う。何をもちて評価とするのか。評価の質を考えていきたい。
- ・学校は子ども預かって安全に返す場所ではなく、学校としての役割、経営がある。そのために評価が重要。
- ・医ケア、研修等に出てみて中央は充実していると思う。評価についても人によって、若さや経験によって乖離がある。その差をどうやって埋めていくか。
- 医ケア保護者会では静岡市の医ケア児支援機関(医ケア児センター)と協力して実施できた。保護者の相談会を行いよい成果があった。本人、保護者を支える仕組みとして医ケアの体制をそういった所からも整えたい。

【来年度の学校経営計画について】

- ・報告と比べて達成方法が入っているので見やすい。目標に対して定量的に評価できるとよいかもしれない。達成方法の手段をやった・やらないだけでなく、その先の結果について評価できるとよい。個人としての評価とやるべきことができているかの評価。評価についても具体的にしておくことよい。
- ・評価の時に迷わないよう「適時周知」や「効果的な取り組みの発信」など、具体的になっていると評価を得やすい。
- ・医ケアに関する目標に2つの視点が入っている。教員が自分のミッションがわかるように。
- ・指導部について今年度の「体育」が来年度「運動」になっている。この辺りがタمامシ色になっている。類型ごとに考えてもよい。個々に分けるところと学校として全体のところを明確にしたい。
- ・ICTも手段の一つ。使ったかどうかではなく、ICTが使える状態、ICTが選択肢にあることが大切。手段と目的が逆にならないように注意。
- ・個別最適、協動的な学びについて、正しく理解しないといけない。
- ・学習環境デザインについて、これからの特支教育は一人ひとりのニーズや権利にどう適応していくか。教職員の理解を深める研修を。子どもを合わせるのではなく、子どもに合わせる。

